HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	形式名詞を資源とするモダリティ助動詞の統語語用論的研究
Author(s)	張, 力丹
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16667号
Issue Date	2025-09-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16667
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98277
Type	doctoral thesis
File Information	Lidan_Zhang_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　張　力　丹

学位論文題名
形式名詞を資源とするモダリティ助動詞の統語語用論的研究

本論文の観点と方法

本論文は、日本語におけるいわゆる形式名詞を含むモダリティ形式を新たな助動詞として認定可能かを含めて関連事象を広範に取り上げ、多面的に論じた成果である。日本語記述文法や一般言語学、語用論などの知見を取り込みながら、統語論の基盤に語用論的特性が強く作用すると考える統語語用論の方法論を主軸にして分析を行っている。

本論文の内容

全体は六部 16 章で構成されている。以下、章ごとに内容の要点を述べる。

第I部は「序論」とし、第 1 章で研究背景を説明したのち、論文構成や研究方法について述べている。第 2 章で先行研究におけるモダリティ論の差異をまとめている。日本語文法におけるモダリティの概念は 20 世紀までムード(mood：法)との混同が多く見られ、日本語だけを念頭に議論してきたこともあり、一般言語学的知見との相違や、研究者による枠組みの異なり、個々の文法が対象に設定する範囲の齟齬などがあることから、代表的なものを網羅して相違点を把握している。

第II部は「予備的議論」として、第 3 章でモダリティの体系を措定するために、ムードとの差異、主観性、ゼロ形態モダリティ、説明のモダリティとされてきた「のだ」の位置づけなどを論じ、本論文におけるモダリティの認定には語用論的特性の考慮が必要だと主張している。いわゆる認識モダリティを主観性と見なせば伝達モダリティを間主観性と見なせる対比関係が成立するが、義務モダリティでは発話内行為の特性が強まることから、これらを単なる主観性の対比で二分して扱うことは難しい。命令や要求を中核とする場合、その相互行為性を重視すれば間主観性を認めるべき点もある。以上を踏まえて、先行研究における問題の単純化を批判している。加えて、命題 P にモダリティ形式 m が後続するという形式性を重視しすぎるあまり日本語の文構造を P+m と単純化した点も、意味に力点を置きすぎた日本語記述文法の枠組みの問題点であり、その呪縛から逃れることが必要だとする考察をおこなっている。言語学的には形態論的に捕捉できるムード（法）に対して、意味機能的に理解されるモダリティ（modality: 法性）という区分が定着しているが、20 世紀までの日本語研究ではモダリティを誤解してムードと呼んでおり、正確な理解を共有する上でも問題点の把握は必要な作業であるという態度を本論文では示している。第 4 章ではいわゆる終助詞類などを伝達のモダリティとする枠組みを検証し、第 5 章ではモダリティの機能を担う形式をモダリティ助動詞と認定する条件と分類法を論じている。助動詞である以上活用体系が明示できること、分解主義をとる形態論的文法では助動詞とみなされない複合辞タイプも助動詞と認められることを述べている。

第III部は「ものだ」という形式を扱っており、本論文の中核をなす論考となっている。第 6 章では主に形態論的にモダリティ助動詞としての成立を論じ、第 7 章では先行研究における記述を再検討してその意味機能を批判的に定義し直している。第 6 章では「ものだ」形式に加えて「ものである」形式による補充法を想定して活用をより精密に記述する方法を提案している。第 7 章では従来の「ものだ」の意味機能の記述案は概ね一致しているものの、全体としての統一性がなく、部分的な逸脱性があることを指摘し、一般性を軸にそれに当為性が加わった義務・指令用法と、一定の条件下で過去の事象の反復性から想起の機能が引き出されるとして、派生関係を基盤

に統一的説明を試みている（なつかしさなどの情緒の喚起は例外なく生じるわけでなく、推意に相当する取り消し可能性を有する)。従来、意外性の用法と扱われたものは「ものだ」単独の意味に帰されるものでなく「よく」をはじめとする副詞類と協働してアドミラティブ(admirative)を形成するものと見なして、周辺的用法に位置づけた。膠着語である日本語では助動詞の重畳のみならず、モダリティ助動詞の重畳も見られることから、第 8 章ではモダリティ助動詞の重畳による複合をどう記述するかについて論じている。日本語では「ものだ」以外の助動詞も重畳するが、「～もののはずだ」などの助動詞の後接させる形式、「べきものだ」など他の助動詞を前接させる形式などが見られることから、第８章では典型的なタイプをいくつか取り上げて、モダリティの範囲や機能の累加・関係などについてまとめている。第 9 章では従属節の末尾に現れる「ものだ」について基準を決めて記述・分類した上で分析を加えており、「もので」のようにやや接続助詞化しているものを含めて、「ものならば」「ものなのに」など、従属節末の位置に現れる「ものだ」の変異について、これらのシンタグマが接続助詞化する段階に相違があることを指摘している。

第IV部は主に「ことだ」という形式を扱っており、第 10 章ではモダリティ助動詞の認定を論じ、第 11 章ではテンス辞やアスペクト辞との関係を形態論に重点をおいて論じている。「ことだ」は「ものだ」と形成過程が似ているが、後続する位置に出現する軽動詞「する」「なる」やテンス辞「た」やアスペクト辞「ている」との複合に関しては「ことだ」のほうが複雑であるため、先行研究にある形態論的な強境界・弱境界という概念を利用して、細かな相違点の確認がなされている。第 12 章では「ことだ」が軽動詞とアスペクト辞を伴った「ことになっている」の形式について、その意味用法を語用論的に論じて、構文推意を有することを主張し、その妥当性を検証している。「～することになっている」は規定の規則・慣習等に従うことによる義務に解釈されることがあるが、これは「～することだ」では得られず、「～することになる」でも得にくい。この種の意味の特定化が生じたことについて、本論文では、先行研究が提案する構文推意という語用論的要因での解釈を適用している。また、それによってどのような効果を得るかについても掘り下げて論じている。

第V部は関連する諸問題として、まず第 13 章で「わけだ」という形式を論じ、第 14 章では、文末に出現すると認定できる形式名詞「もの」「こと」「わけ」について考察している。本論では、「もの」「こと」では明確に終助詞用法が形式名詞用法・助動詞用法から分離しているが、「わけ」ではそのような分岐はあまり進行していないとする。例えば、「立派なもの」「大変なこと」のように形容動詞を使えば連体形を要求する形式名詞と、「立派だもの」「大変だこと」のように終止形を要求する形式名詞を区別することができ、後者が終助詞であること、本論で言うモダリティ助動詞が前者の特性を持っており、形式名詞の特性を温存したまま構文化を生じたことが確認できるとしている。第 15 章では否定とモダリティ助動詞の関わりについて論じている。形式名詞の前に強境界を持ち、膠着語として後続部にも否定辞を配置できる日本語では、「～ないことだ」「ことで（は）ない」のほかにも、両方を重ねた多重否定「～ないことで（は）ない」も形態論的に可能である。加えて、「ことでない」のほかに「ことがない」があり、「が」は「は」や「も」にも置換可能で、変異は相当に大きい。しかも、実際の使用では否定先行と否定後続では支配域の違い以外に慣用的に生じる解釈の偏りがあり、機械的には処理できない。本論文では、これらの形式の形態論的多様性を網羅的に記述し、意味解釈の偏りを整理して、分析している。

第VI部（第 16 章）で全体を総括し、問題点と見通しを確認して論述を終える。

以上